近現代の河南における魏華存説話
——「二仙救唐王」をめぐって

山下一夫

一、はじめに

道教の第一洞天・王屋山が位置する河南省済源市の隣、焦作市陽洛山にある静応廟は、晋の女仙・魏華存が修行した故地とされている。ここに「二仙救唐王」と称する、廟の創建にまつわる以下のような逸話が伝えられている[*1]。

唐の初めのころ、李世民は兵を率いて王世充を討伐し、双方が黄河北岸で血戦いを繰り広げた。戦いは三日三晩に及んだが、数において劣勢の唐軍は不利に立たされ、援軍も到着しなかったため、やむなく北側の地域に撤退した。さらに王世充が王仁則に兵を与えて追撃させ、混乱の中で李世民の軍は太行山の中の渓谷まで追いつめられた。さらに北に行くとそこは険しい崇山が聳え立ち、これ以上進むことができないため、李世民は仕方なく兵士たちに谷の入り口を守らせ、援軍を待つことにした。李世民が人数を数えたところ、軍勢はわずか３万しか残っていなかった。さらに重大だったのは、敗走する途中で食料や物資がすべて王仁則に奪われたことで、兵士たちは飢えと渇きのために今にも力が尽きようとしていた。陣は構えたものの、李世民は焦燥して全く気が休まらず、飢えと疲労による困窮を打開しようと、日が暮れてから数名の腹心を連れて北側の地形を探索しに行った。李世民は陽洛山のふもとまでやって来て、幾重にも重なる山々を見上げた。前方には追っ手が迫り、後方には退路が無いことを思い、天を仰いでため息をつき、「天は李世民を滅ぼそうというのか」と言って、思わず涙をこぼした。すると、黄昏の陽の光の中から、手に甕を持ち、まぐさを小脇に抱えた村娘がこちらに向かってくるのが見えた。村娘は眉目秀麗で、飄々と野山を歩く様はまるで下界に下った神仙のようだった。村娘は馬の前まで来ると、持っていた甕とまぐさを置いて、李世民に深く一礼をした。「陛下、ご機嫌麗しゅう。」李世民は鞍から転がるように降りて言った。「それがしは敗軍の将である。どうしてそのような礼を受けられようか。」村娘は地面の上に置いた甕を指さして言った。「陛下がおいでになることを知り、特に陛下と将兵たちのために鹹米飯を作って参りました。どうぞお召し上がり下さい。」李世民はわけが解らず、こう尋ねた。「鹹米飯というものは聞いたことがない。そもそもこの甕の中の食べ物だけで、どうやって多くの将兵と馬を腹一杯にできるというのだ。」そこで村娘が甕

注 1…都屏君「唐太宗和咸米飯」(『焦作晩報』2011年6月20日、頁15)。なお同様の記載は董尚祥「董尚祥談神農山仏道文化及其影響」(『焦作晩報』2011年6月2日、頁12)、裴超「神農山道教聖地二仙廟遠離喧囂的浄地」(『時尚北京』2013年8期、頁226)などにも見られる。

を開けると、とても美味しそうな香りがしました。甕の中には、お米とおかずが混ぜられており、その上に白髪ネギ・油・山韮が載っていました。この鹹米飯は、甕一杯に詰まっているのに焦げておらず、また油が入っているのに油っこくなく、赤い色をしていて温かく、美味しそうな香りがあたり一面に立ちこめました。李世民はお腹がすいているのを我慢し、手を合わせて言った。「あなたはどこのお方ですか。このような荒山で、どこから食べ物を持って来たのですか。」村娘は答えた。「私は幼いころ黄河の岸辺で育ちました。名を魏華存と申します。戦乱を避けてここに移りましたが、その際に実家から持ってきた米を食べてしまうのはもったいなく思い、こうして陛下に献上に参ったのです。」李世民は思った。「私はまことの神仙に出会ったのか。」しかしくどくど聞くようなことはせず、その場にいた部下と馬に食べるよう指示した。甕の中の鹹米飯は取っても取っても尽きることはなく、またまぐさも何頭もの馬が争って食べても食べ尽くされることがなかった。そこで将兵全員に鹹米飯を食べるよう、また馬引きにはすべての馬にまぐさを与えるよう命じたが、不思議なことに鹹米飯もまぐさも全く減らず、みな腹いっぱい食べて軍全体が奮い立った。李世民が振り返ると村娘はいつの間にかいなくなっていた。そこで李世民は将兵たちを連れて陽洛山に向かって三回叩頭して言った。「李世民はこの地に追い詰められましたが、幸運にも魏夫人に助けていただきました。いつか皇帝として即位することができたら、必ずやここに廟を建てて神像を祀り、仙人様に食事を与えていただいたご恩に報いたく思います。」その夜、李世民は王仁則が油断した隙を突いて奇襲をかけ、援軍とともに一気に敵を撃破して勝利を収めた。後に李世民が大唐の皇帝に即位した時、かつて魏夫人に太行山で食事を与えてもらった恩を忘れず、大将の尉遅敬徳に命じて以前追い詰められた谷の中に壮大な廟を建てさせた。この廟は「静応廟」と名付けられたが、一般には「二仙廟」と呼ばれている。廟の中に祀られているのは魏華存で、民間では尊んで「二仙奶奶」と称している。この谷は「仙神谷」と名付けられたが、現在の河南省沁陽の二仙廟景区にあたる。二仙奶奶魏華存の鹹米飯は軍によって唐の都・長安にも伝えられ、

魏華存を祀る本殿の「紫虚宮」に飾られていた絵画

注2…唐朝初年，李世民率兵征讨王世充，双方在黄河北岸展开血战。经过三天三夜的厮杀，唐军因寡不敌众、援兵迟迟未到，被迫北撤。王世充派王仁则带兵一路追来，慌乱中李世民大军退入太行山中一条峡谷里。再往北，是崇山峻岭，无路可走，无奈，李世民命军士严把谷口，等待援军。李世民清点人马，仅剩3万残军。更为严重的是，溃败途中粮草辎重均被王仁则部劫获，将士们又饥又渴，筋疲力尽。安下大营后，李世民心急如焚，如坐针毡。黄昏，李世民不顾饥饿劳累，带着随从骑马往北查看地形。李世民来到阳洛山下望着重重叠叠的大山，想着前有追兵、后无退路，仰天长叹："天啊，莫不是你真要亡我世民乎！"不觉泪流满面。恍惚中，从西边太阳的余晖里，看见一村姑沿着山道翩翩而来。她手提一个瓦罐，腋下夹着一捆谷草。李世民定睛一看，这村姑眉清目秀，身材高挑，步履轻柔飘逸，如神仙下凡。到了马前，村姑放下手中物件，向李世民深施一礼说："明君在上，受小女一拜。"李世民滚鞍下马："世民乃败军之将，怎敢受此大礼？"村姑指指地上的瓦罐说："得知明君要来，小女特地为明君及众将士煮熬了一锅咸米饭，请明君用膳。"李世民纳闷了，问："咸米饭？没听说过。再说了，这一罐一草怎能喂饱我的千军万马？"村姑掀开瓦罐，一股诱人的香味扑鼻而来。罐内大米饭同菜肴掺和

唐王朝の宮廷料理になった[*2]。

筆者が2011年8月に静応廟で調査を行った際には、「二仙救唐王」と題する上記の伝説を示す絵画が、魏華存を祀る本殿の「紫虚宮」に飾られていた[*3]。

説話に登場する王世充は、甥の王仁則とともに洛陽に拠った隋末の群雄の一人で、史実の上でも確かに李世民は開明2年（620年）に戦って打ち負かしている。しかしその際に魏華存の加護があり、王朝建国後に尉遅敬徳に命じて廟を建てさせたという話は、正史はもちろん、碑文や地方志などの史料、また『道蔵』所収の魏華存関連資料にも見えない。通俗文学でも、隋末唐初を描いた講史小説は明・熊大木『唐書志伝通俗演義』（八十九節）、明・羅貫中『隋唐両朝志伝』（百二十二回）、明・諸聖隣『大唐秦王詞話』（六十四回）、明・袁于令『隋史遺文』（六十回）、明・無名氏『徐文長先生批評隋唐演義』（百十四節）、清・褚人獲『隋唐演義』（百回）、清・鴛湖漁叟『説唐演義全伝』（六十八回）などがあるが[*4]、このエピソードが載っているものは見あたらない。

もちろん、単に文字資料として残されていないだけで、李世民が尉遅敬徳に命じて静応廟を建てた「史実」が現地で1400年の間伝承されてきた、と考えられないわけではない。しかし、後述するように済源・焦作一帯は明代に住民が大きく入れ替わっていることなどを考えても、そうした想定にあまり現実性は無いだろう。筆者は、現存する幾つかの別の資料を検討することで、この説話の発生と展開についてある程度再構成することができると考えている。そこで本稿はこの「二仙救唐王」の説話の形成過程について検討し、そこから河南における魏華存信仰について考察を加えるとともに、また近現代における王屋山道教のあり方について私見を述べてみたいと思う。

二、河南の魏華存

魏華存という女仙については一般的に、彼女が永嘉の乱以後に移り住んだ中国南方の道教の伝統との関係で説明されることが多い。すなわち東晋の興寧二（364）年に彼女の神霊が茅山で霊媒の楊羲のもとに降り、あるいは長子の劉璞が楊羲にその教法を伝え、上清経典の道教思想、いわゆる「上清派」が興起したと言われている[*5]。魏華存の廟としては、彼女が南嶽を治める「南嶽魏夫人」とされたことで湖南省の南嶽衡山に建立された、黄庭観や洞霊宮などが比較的よく知られているだろう。

しかし魏華存が永嘉の乱以前に居住したのは、中国の北方に属する河南省焦作の陽洛山であった[*6]。静応廟について記した現存最古の碑文である唐・垂拱四（688）年の「木澗魏夫人祠碑銘」には、この廟が魏華存の故地であること

在一起，漂着葱丝油花、山韭菜。这咸米饭稠而不煳，油而不腻，热乎乎，红滴滴，香气四溢。李世民强忍饥饿，拱手问："敢问娘子何许人也？荒山野岭的，从哪弄来这些粮食？"村姑答："小女自幼生活在黄河岸边，姓魏名华存，为躲避战乱，逃难至此，从娘家带来的大米舍不得吃，专等明君前来。"李世民想："莫不是真的遇见了神仙？"也不多问，命随从吃饭、喂马。只见那瓦罐里的咸米饭舀了还有，总也取不尽用不竭；那捆谷草几匹马争着吃也吃不完。于是传令下去，让全体将士列队逐一前来取饭，让马夫取草喂马。奇怪的是，这饭这草依然是一罐一捆，丝毫没有减少。将士们吃饱喝足，全军上下精神抖擞，士气高涨。回头再看那村姑，不知何时已不见了踪影。李世民率将士面向阳洛山叩了三个头说："世民今困此地，幸遇魏夫人相救，他日若能面南背北，定在此地修庙塑像，以谢仙人一饭之恩！"当夜，趁王仁则麻痹之机，李世民突出奇兵，会同援军一举击溃了敌军，大获全胜。后来，李世民做了大唐皇帝，他念念不忘当年魏夫人太行山赠饭之恩，命大将尉迟敬德监工，在昔日被困的山谷中修建了一座气势宏伟的庙宇，取名"静应庙"，俗称"二仙庙"。庙中供奉的正是魏华存，民间尊称"二仙奶奶"。这个山谷也取名为"仙神谷"，就是今河南沁阳的二仙庙景区。二仙奶奶魏华存的咸米饭随军传入了唐都长安，被定为御膳。

を述べた後、以下のように記されている[*7]。

> 人々は祠壇を創ることで、（魏華存の）清浄玄妙なる姿が存続することを望み、その「無味を味わう」ことを願った。創建年代について、詳しくは解らない[*8]。

魏華存は地域の著名な女仙ということで、焦作では生前から信仰を集めていたとする説もあるが[*9]、唐代以前の状況について、少なくとも現存の資料からは詳しいことは解らない。ただ、この種の碑は廟の重建に際して創られることが多く、かつ碑文の選者が「弘文館学士路敬淳」という王朝側の人間であることを考えれば、伝説のように尉遲敬徳の創建なのかどうかはとりあえず置くとして、朝廷がこの時に廟の大規模な修築を行ったと考えるのが自然である。これはもちろん、唐代に道教が国教となり、中でも南方の茅山で醸成された魏華存を初祖と奉じる教法に重きが置かれたことで、王朝が北方の彼女の故地にも注目した結果だろう。

「木澗魏夫人祠碑銘」にはまた次のような一節がある。

> 天は事物に影響を及ぼすのだから、祈れば必ず聞き届ける。雨乞いをすると、車で戻るよりも先に雨が降ってくる[*10]。

唐代はもちろんこの廟で国家道教の枠組での儀礼や上清経典の修法なども行われたのだろうが、この碑文が示すのはむしろ廟の「祈雨」という現世利益的な性質である。それは宋代以降も続いたらしく、金・正隆二（1157）年の「重修紫虚元君殿記」には以下のようにある[*11]。

> 古老の言い伝えでは、旱魃や洪水、また民が病気にかかった時に、祈ると必ず験があるという。宋の崇寧年間（1102-1106）のこと、州県の役人が様々な場所で祈願しても験が無かった時に、宰相を務めた河内の陳崇がこの祠に謹んで祈りを捧げて言った。「わたくし陳崇は民を牧する役人です。このような旱魃が起きた罪は、ひとえに県知事の人徳の無さにありますが、雨を降らせてくだされば、その罪は我が身に移しても構いません。」祈り終わるや軒伝いに雲が広がり、大雨が夜通し降って、水が充分な程になってから止んだ。このことを州の長官が朝廷に奏上したところ、皇帝から「静応廟」の扁額を賜った[*12]。

北方の乾燥地域に位置する河南省焦作で旱魃は重要な問題であり、ここに作られた廟に祈雨の性質が求められるのは自然の成り行きである。魏華存は高位

注3…調査については土屋昌明「第一大洞天王屋山洞の陽台観と紫微宮の現況」（『洞天福地研究』第三号、2012年、頁35-54）および鈴木健郎「平成23年度第2回洞天調査報告　王母洞・霊山洞（王屋山）および静應廟・木澗寺・修仙洞（沁陽市）」（『洞天福地研究』第三号、2012年、頁92-107）を参照。

注4…隋末唐初を扱った講史小説については、上田望「講史小説と歴史書（1）－『三国演義』、『隋唐両朝史伝』を中心に－」（『東洋文化研究所紀要』第130冊，1996年、頁97-180）、千田大介「隋唐物語を読む」（鈴木陽一編『中国の英雄豪傑を読む』、大修館書店、2002年、頁119-168）などを参照。

注5… 例えば「魏華存」、『道教事典』（野口鐵郎・坂出祥伸・福井文雅・山田利明編、平河出版社、1994年）、頁86など。

注6…張景華・秦太昌「晋魏華存修道陽洛山考」、『中国道教』、2001年第1期、北京：中国道教協会、頁40-43。

注7…陳垣編纂『道家金石略』、文物出版社、1988年、頁77-79。

注8…創祠壇，想希夷其若存，庶恍忽其無味，建立之始，年代莫詳。

の女仙なので祈ればもちろん雨ぐらいは降らせてくれるのだろうが、しかしそれは例えば上清経典の思想のようなものからはすでに一定の距離があることは否めないだろう。

なお、元代に入ると静応廟は全真教化している。2001 年に紫陵鎮宋寨村で出土した元・中統二（1261）年の「重修陽洛山記」碑文には以下のように記されている（なお□はもとの碑文で欠けている部分である）[*13]。

> 稽首再拜して申し上げます。「我が□□□□□□□□五祖七真に依って、優れた徳を大いに発揚し、全真の教えの玄妙なる因縁を解き明かし、純樸の大道が陽洛山に満たされますよう。」[*14]

碑文の「全真」「五祖七真」などの表現から、全真教の道士が廟を「重修」したことが理解される。これは道教史で一般に語られる、没落した道教施設を全真教が復興させたという出来事の一環として捉えられるが、それはまた逆に言えば、静応廟は全真教がそうするほどに有力な廟であったことも意味しているのだろう。

三、二仙という名称

冒頭に紹介した説話で魏華存は「二仙」と呼ばれ、静応廟も別名は「二仙廟」となっていた。同様に河南省北西部に多く分布する魏華存を祀った廟も、やはり一般には二仙廟と称されている。次ページの写真は、2011 年 8 月の調査で訪れた済源市梨林鎮大許村の魏華存廟だが、入り口にやはり「二仙廟」とされている[*15]。

魏華存の別称を「二仙」とすることは『道蔵』には見えない。これについては、静応廟の至元五年の碑文「太一元君紫虚元君広恵之碑」の以下のような記述が関わる[*16]。

> これは二聖元君の神霊が、人々を畏怖せしめたということだ[*17]。

碑文の題名が「太一元君」「紫虚元君」の順なので、「二聖元君」は後者、すなわち魏華存を表している。「太一元君」については碑文中に言及が無いが、『碧霞元君護国庇民普済保生妙経』[*18]を見ると碧霞元君の別称として用いられている。ここから、元代の一時期に碧霞元君信仰が静応廟に入り込み、本来の主人であるはずの魏華存は「第二位」となって「二聖元君」と呼ばれ、さらにそれが口語的な「二仙奶奶」に変化したと推測される[*19]。実際、山西省から河南省にかけての地域には、碧霞元君の両脇侍に紫虚元君（すなわち魏華存）と

注 9…例えば前掲『道家金石略』頁 1110-1111 に見える元代の「重修紫虚元君静応廟碑銘」には、「晋代から今に至るまで参拝は連綿と続き、未だかつて絶えたことは無い」（自晉到今，香火悠悠，未嘗稍息）とあり、静応廟は晋代、すなわち魏華存の生前からあったことが述べられているが、かなり時代を下ってからの記述であり、資料的な信憑性は低い。

注 10…天然感物，祈必靈歆。所請甘霖，未回車而降澤。

注 11…前掲『道家金石略』、頁 1013。

注 12…古老相傳，旱乾水溢，凡民有疾病者，禱無不應。昨於宋之崇寧年間，旱之太甚，州縣官僚遍走望内未見應，間有河内宰陳公崇，虔求再拜於祠下。公曰：崇黍民官也，睹此大旱，罪在令長，若蒙甘澤，願移咎於身。懇禱既畢，隨軒遂布，一夕滂霈而告足。州牧俱奏於朝，敕賜靜應廟為額。

注 13…鄭素春「唐、宋時期魏華存信仰研究」、荘宏誼主編『道教女神信仰研究』、新北市：輔大書坊、2014 年、頁 38-39。

注 14…稽首再拜曰：賴我□□□□□□□□五祖七真，弘揚首德，闡全清虚妙縁，大朴淳風焉，能載於陽洛山哉。

注15…なお趙衛東「河南済源全真道宗派伝承考」(『道教研究学報』第五期,香港:中文大学出版社,2013年,頁81-110)によれば、この大許二仙廟は唐代に創建され、明代に全真教龍門派の管轄となっている。また趙昕毅「社親与村廟:紫虚元君信仰在華北」(『西北民族研究』2014年第1期、蘭州:西北民族大学、頁28-33)は、焦作市の沁陽市邗邰村にある邗邰二仙廟の研究から、この一帯に点在する二仙廟は清代以降全真教の管理から、次第に村落共同体の主神へと移行したことを指摘している。

注16…道光五(1825)年『河内県志』巻二十一「金石志下」所収。

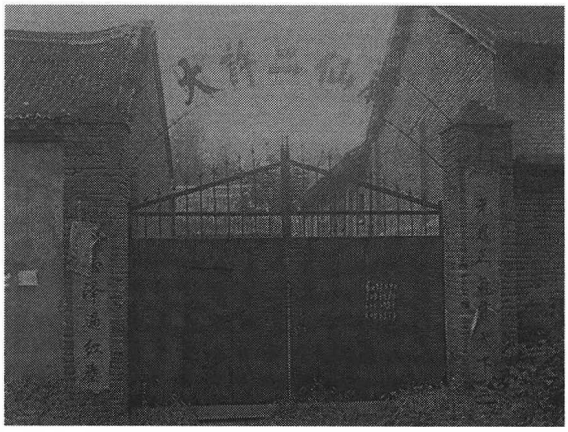
注17…其正二聖元君威靈使民畏服之謂也。

注18…『万暦続道蔵』所収、S.N.1445。

注19…李留文「豫西北与晋東南二仙信仰比較研究——兼論区域文化之間的互動」、『世界宗教研究』2010年第5期、頁81-86。

注20…王東「太行山陽"二仙"溯源(下)」、『焦作日報晩報』2010年12月13日版、頁18。

済源市梨林鎮大許村の魏華存廟



入り口に「二仙廟」

山西省陽泉市孟県御棗口村の泰山廟泰山奶奶殿の「佩霞元君三尊像」

佩霞元君を配する造像例が多く見られる[*20]。左図は、山西省陽泉市盂県御棗口村の泰山廟泰山奶奶殿の「佩霞元君三尊像」である（中央が碧霞元君、右が紫虚元君、左が佩霞元君）[*21]。

以上の点からすると、魏華存が二仙と呼ばれるようになったのは、中国北方で近世に興起した泰山の女神・碧霞元君の信仰に組み込まれた結果ということになるが、実情はもう少し複雑である。というのは、河南省に隣接する山西省には、楽氏姉妹という二人の女仙に対する、以下のようなもう一つ別の「二仙奶奶」信仰があるからである[*22]。

> 二仙は殷王朝の微子啓の子孫で、先祖は陵川に住んでいたが、後に屯留に移った。父の名は楽三宝と言い、母の楊氏は神光を感じて姉妹を産んだ。二人は並外れて聡明で、普通の人々と異なっており、また言行やふるまいはすべて天の理に叶っていた。後に母親が亡くなると、父は呂氏を娶ったが、呂氏は姉妹を虐げ、冬だろうが夏だろうが外へ食べ物を探しに行くように言いつけた。後に一家は壺関の紫団山に移住したが、二人はそこでも畑で麦を拾ってくるよう継母に言われた。どうしても落ち穂が見つからず、天に訴えたところ、空から黄竜が降ってきて、二人はそれに乗って昇天した。後に土地の人たちは二人を祀り、祈れば必ず霊験があった。宋代、「民に功あり」として真人の号を賜り、姉は沖恵、妹は沖淑とされ、廟額を「真沢」とした[*23]。

この楽氏二仙信仰は唐代に興起したが、主な目的は焦作の魏華存と同じくやはり「祈雨」であった[*24]。山西省には各地にこの楽氏姉妹を祀る廟が存在し、

山西省晋城市陵川県西渓二仙廟

注 21…http://sxyxlcs.blog.163.com/blog/statics/（2015 年 1 月 6 日閲覧）

注 22…段建宏「民間信仰与地域社会：対晋東南二仙故事的解読」、『前沿』2008 年第 11 期、呼和浩特：内蒙古社会科学聯合会、頁 97-100。

注 23…二仙为商朝微子启之后人，其祖居陵川，后徙居屯留。父名乐三宝，母亲杨氏，感神光而生姐妹二人。二人聪明颖异，与众不同，言行举止皆合乎大体。后母亲早逝，父亲又娶吕氏，吕氏残酷虐待姐妹二人，无论冬夏都要出去找寻食物。后举家迁移至壶关紫团山，二人仍被继母打发到田间拾麦，因无所得，呼天以诉。有黄龙忽从空下，御之以升。后乡民祀之，祷则必应。宋时因有功于民，赐号真人，长曰冲惠，次曰冲淑，庙额真泽。

注 24…張薇薇「晋東南地区二仙文化的歴史淵源及廟宇分布」、『文物世界』2008 年第 3 期、太原：文物世界雑誌社、頁 45-52。

注 25…写真は張栄「西溪二仙廟保護勘察技術」(『中国文化遺産』2010 年第 2 期、北京：国家文物報社、頁 61-65）による。

注 26…前掲「晋東南地区二仙文化的歴史淵源及廟宇分布」、頁 46。

注 27…宋徽宗崇寧年間西夏侵擾中原，朝廷派大軍出征路過紫團山，由於長途跋涉，軍旅困乏，二仙化身為農婦為朝廷大 軍沿途送飯。消息傳至朝廷，宋徽宗於政和元年敕封樂氏二女為沖惠、沖淑真人，並敕立宮廟命民間以祭祀，廟號真澤。

注 28…剣雄主編『中国移民史』第五巻（福州：福建人民出版社、1997 年)、頁 250-252。

注 29…安介生『山西移民史』(山西人民出版社、1999 年)、頁 311-318。

注 30…中国社会科学院・澳大利亜人文科学院編著『中国語言地図集』(香港：朗文、1987 年)、B7「晋語」。

西溪村二仙廟の楽氏二仙像

中でも二仙の故郷とされる山西省晋城市陵川県の西溪村にある二仙廟は、その代表的地位を占める[*25]。

また山西の楽氏二仙は、魏華存の「二仙救唐王」によく似た以下のような説話を有している[*26]。

> 宋の徽宗の崇寧年間のこと、西夏が中原に侵入したため、朝廷は大軍を派遣した。しかし長い距離を移動したせいで、軍隊は紫団山までやって来た時には疲弊していた。そこで二仙は農婦に化けて宋軍のために道中で食料を与えた。この話が朝廷に伝わると、宋の徽宗は政和元年に楽氏姉妹を沖恵・沖淑真人に封じて、勅命によって宮廟を建立し、廟号を真沢として、民に祀らせた[*27]。

そして重要な点として、河南省の済源・焦作一帯には、明代以降山西省から大量の移民が入っていることである。この山西移民は、明の洪武年間に臨汾市洪洞県からやって来たとされ、一般には「洪洞大槐樹」という、移民に向かう道の出発点だった洪洞県城外のエンジュの木を自称として用いている[*28]。しかし明代の洪洞県の人口推移を検討すると実際にはこの説は成り立たず、洪武年間の移民政策を「神話化」しているだけで、移民は明初から清末までの長期間にわたっており、また出身地も洪洞県だけでなく、山西省中南部の広い範囲からやって来ていることが指摘されている[*29]。済源・焦作一帯が、河南省の大部分で行われている中原官話ではなく、山西省を中心に話されている晋語の下位区分である「邯新片」の分布地域で、言語的に山西省中南部と連続性があることもその傍証となる[*30]。

楽氏二仙信仰も、方言同様にこの山西移民が河南省に持ち込んだと考えるのが自然であろう。そして茅山の思想的伝統から離れて、同じように「祈雨の女神」となり、かつ碧霞元君の脇侍の「二聖元君」だった魏華存の上に被さったことは容易に想像できる。その際に楽氏二仙が宋軍に食料を提供したという説話も流入し、「二仙救唐王」に変化したのだろう。ただこの場合、原説話は宋代が舞台だったのにもかかわらず、それがなぜ魏華存では唐王朝建国の話に変更されたのかという問題が残る。この点について次章で検討してみたいと思う。

四、「救唐王」故事

唐王朝の建国と道教の関係という点では、『唐会要』巻五十「尊崇道教」に記されている以下のような逸話がある。

> 武徳三年五月、晋州の人の吉善行が（山西省浮山県の）羊角山である老人に出会った。老人は赤毛の白馬に乗っており、とても立派な姿をしていた。老人は言った。「私の言葉を唐の天子に伝えよ。私は汝の祖先である。今年賊を平定した後、子孫は千年の間国を統治するであろう。」唐の高祖李淵はこれを奇蹟だとして、その土地に廟を建てた[*31]。

しかしこれは李世民ではなく父親の李淵の話で、また場所も山西省浮山となっている。この説話もやはり山西移民が済源・焦作一帯に持ち込み、「二仙救唐王」のソースとなった可能性はあるだろう。ただ河南省には、さらにこれよりもよく似た説話が先行して成立している。それは少林寺を舞台とした「十三和尚救唐王」という説話である。いま、『少林寺民間故事』に収録されている「十三和尚救唐王」（尚根五・徳禅・行政・馬洪山から1958年～1980年にかけて採集）、およびその後日談となる「唐太宗賜封少林」（孽自清から1980年に採集）によってその概要を示すと以下の通りとなる[*32]。

> 隋末、王世充が洛陽を占拠して皇位を僭称し、国号を鄭と定めた。そして甥の王仁則を領兵大元帥に任命し、暴虐の限りを尽くしていた。その頃、洛陽から十五里離れた柏谷荘にある少林寺には、曇宗をはじめとする十三人の武芸に秀でた僧侶がいた。ある時「李世民」と記された玉璽を拾ったことで、唐王・李世民が王世充に捕らえられていることを知ったかれらは、洛陽に潜入して得意の武芸で李世民を救出し、王仁則も捕らえることに成功した。李世民は皇帝に即位した後、少林寺を手厚く保護してかれらの恩に報いるとともに、僧侶たちに武芸を奨励した。この時に賜ったのが天王殿の東側にある「唐太宗賜少林寺主教碑」である。碑文の「世民」の部分

注31…武徳三年五月，晋州人吉善行于羊角山見一老叟，乗白馬朱鬣，儀容甚偉。曰：「謂吾語唐天子，吾汝祖也。今年平賊後，子孫享國千歳。」高祖異之，乃立廟于其地。

注32…「十三和尚救唐王」「唐太宗賜封少林」、王鴻鈞『少林寺民間故事』（河南人民出版社、1981年）、頁25-34。

は草書になっているが、これは李世民の御筆である。

また現在少林寺には、この物語を描いた、清代の以下のような「少林寺拳譜壁画」も飾られている[*33]。

上記の説話の最後で言及されている「唐太宗賜少林寺主教碑」は、「告柏谷

「少林寺拳譜壁画」

塢少林寺上座書」の別名である。現物は摩滅が激しいが、幸いなことに拓本が幾つか残されている上、『全唐文』巻十「太宗(七)」に以下のように全文が収録されている[*34]。

太尉・尚書令・陝東道益州道行台・雍州牧・左右武候大将軍・使持節涼州総管・上柱国・秦王である世民が、柏谷塢少林寺の上座寺主以下の門徒、軍民の首領、士庶たちに告げる。近年、天下は大いに乱れ、何処にも主君が存せず、世界は傾き、三乗の大道は途絶えた。閻浮提は動揺し、軍馬の蹂躙するところとなり、神州の大地は揺れ動き、群魔が跋扈するに至った。しかるに我が社稷は道教の図籙を受け、仏教の正諦を護持することで、天下を御する両輪を得て、ついに帝位に登り詰めた。そこで万民に徳を広め、仏僧に施しを行うことで、万民は仁者の徳を浴するだけでなく、彼岸の恵みにも与ることもできた。王世充は帝位を僭称し、天道に悖る分不相応な考えによって悪逆の限りを尽くした。しかし今や仁徳の風が遠くからわき起こり、智慧の明かりが世を照らし、八正道の途が開かれ、天下は復興した。法師たちは深慮と機知によって夙に妙因を識り、治国の妙案を打ち立て、ともに福地へと赴いた。そしてかの逆賊を捕らえ、浄土を拡げ、忠心を捧げたことで、朝廷にその名を知らしめた。その壮大なる証果修真の道は、伺う

注33…中国国家図書館オフィシャルサイト・「国図空間中華世遺嵩山古建築群」http://www.nlc.gov.cn/newgtkj/zhsy/201109/t20110921_51575.htm（2015年1月5日閲覧）より。この壁画を清代のものとするのは栗勝夫「少林棍論略」（『北京体育大学学報』、第20巻第2期、北京：北京体育大学、1997年、頁17-20）によるが、清代の寺志などに記載が無いことから、より時代の下ったものである可能性もある。

注34…太尉、尚書令、陝東道益州道行臺、雍州牧、左右武候大將軍、使持節涼州總管、上柱國、秦王世民，告柏谷塢少林寺上座寺主以下徒眾及軍民首領士庶等。比者天下喪亂，萬方乏主，世界傾淪，三乘道絕。遂使閻浮蕩覆，戎馬載馳，神州糜沸，群魔競起。我國家膺圖受籙，護持正諦，馭舄飛輪，光臨大寶。故能德通黎首，化闡緇林，既沐來蘇之恩，俱承彼岸之惠。王世充叨竊非據，敢逆天常，窺覦法境，肆行悖業。今仁風遠扇，慧炬照臨，開八正之途，復九宇之跡。法師等並能深悟機變，早識妙因，克建嘉猷，同歸福地。擒彼兇孽，廓茲淨土，奉順輸忠之效，方著闕庭；證果修真之道，更宏像觀，聞以欣尚，不可思議，供養優賞，理殊恆數。今東都危急，旦夕殄除，並宜勉終茂功，以垂令範，各安舊業，永保休祐。故遣上柱國德廣郡開國公安遠往彼，指宣所懷，可令一二首領立功者，來此相見，不復多悉。

につけ壮麗かつ不可思議であり、厚い供養と恩賞を与えたく思う。天下の平定は決して定めであったわけではない。いま洛陽は切迫した情勢にあり、日夜掃討が進められているが、建国の偉業を打ち立てて天下に手本を示し、民がもとの職業に落ち着き、とこしえに天佑を保つよう望んでいる。そこで上柱國徳広郡開国公の李安遠を彼の地に遣わして思う所を伝え、功績のあった一、二人の首領を拝謁させる。不悉。

ただこの碑文は、「十三和尚救唐王」の説話の「証拠」とするには幾つかの問題がある。まず碑文は、拓本を見ると確かに説話で言うごとく「世民」の二字が草書になっているが、これは現存する李世民の筆跡とは異なっている[*35]。そもそも初期の唐王朝が少林寺を保護したという話は正史の類に記載が無いため、碑文自体は確かに『全唐文』に収録されてはいるものと、後世の偽作ではないかという疑いも残る。

また説話では「武芸に秀でた十三人の僧侶」が「唐王李世民」を救出したということになっているが、碑文には僧侶の武芸への言及は無く、十三人という数字も挙がっていない上、李世民も「秦王」という称号は見えるが「唐王」ではない[*36]。仮に碑文が偽作でないとしても、ここで記されているのは単に、少林寺の僧侶と付近の居民の唐王朝建国への功績を李世民が認めたというだけである[*37]。

この説話は明らかにいわゆる少林拳の由来譚を成しており[*38]、1982年の映画『少林寺』の題材ともなっているが[*39]、唐代に少林寺を訪れた文人墨客の詩文や遊記の類に僧侶の武芸に関する言及が見当たらないことから考えても、李世民が拳法を奨励したというのは後世の作り話だと思われる。
ただ、問題はこの説話が史実かどうかではなく、この説話がいつから語られたのかという点である。これについては、明・程宗猷「少林棍法闡宗」巻一「紀略」に以下のような記述がある[*40]。

唐初に至り、僧の曇宗らが僭主に対して挙兵し、王世充と甥の王仁則を捕らえ、唐王朝に帰順した。唐の太宗はその忠烈を褒め、曇宗を大将に命じて田畝を与え、御書を与えて慰労し、四十頃の土地と水車一つを賜った。いまの谷荘がこれである[*41]。

ここでは曇宗が「挙兵」し、「王世充と甥の王仁則を捕らえた」としていて、「十三人の僧侶」については語られていないものの、唐王朝の建国と少林寺僧の武芸が結びついた現在の説話とほぼ同内容となっている[*42]。明代に少林寺で興起した「少林棍」は、後の少林拳とは異なっているが、武芸という点では同様であり、おそらく当時その由来譚として作られた逸話を程宗猷が記録した

注35…李秋玲「少林寺碑碣考」、『体育文化導刊』2010年第7期、北京：国家体育局、頁100-102。

注36…張卓・程大力「唐代僧人習武事迹考析」、『首都体育学院学報』第19巻第3期、2007年、北京：首都体育学院、頁101-104。

注37…程大力・張卓「少林寺"十三棍僧救唐王"詳考」、『成都体育学院学報』2007年第1期、成都：成都体育学院、頁46-50。

注38…なお付言すると、日本で一般に普及している少林寺拳法は、日本人の宗道臣が戦後日本の香川県で創設した武道で、ここで言う少林拳とは異なっている。

注39…監督・張鑫炎、主演・李連杰、製作・中原電影製作公司。

注40…程宗猷『耕餘剰技』所収本、釈永信主編『中国武術大典』第16巻（北京：中国書店、2012年）、天啓元年（1621）刊影印。

注41…至唐初，僧曇宗等，起兵拒偽師，執王世充姪仁則，歸本朝。太宗嘉其義烈，拜曇宗為大將，餘俱賜田數。降璽書，宣調慰勞，併錫地四十頃、水碾一具，即今谷莊是也。

注42…なお「十三人の棍僧」説が付加されるのは、清の嘉慶年間に蔡永兼が書

のだろう。

さらに乾隆十三（1748）年の『少林寺志』の「芸林・詩・七言古詩」には、清の景日昣の「観唐王告少林寺教」という詩が収録されている[*43]。前出の少林寺の「告柏谷塢少林寺上座書」について詠んだ詩だが、注目されるのはここで李世民を「唐王」と呼んでいることである[*44]。これは、少なくとも乾隆年間の段階ではすでに少林寺の説話が「救唐王」のタイトルで呼ばれていたことを示唆している。

「十三和尚救唐王」が明清の早い段階の文献で辿ることができることを考えると、「二仙救唐王」の方が後出で、これを取り入れたと考えるのが自然であろう。すなわち、本来宋代を舞台としていた楽氏二仙の説話は、河南省でこの少林寺の物語に出会い、あるいは羊角山伝説なども勘案しつつ、この話を「道教化」したものと思われる。

五、懐梆と二仙廟

さて、済源・焦作一帯はかつて懐慶府と呼ばれており、ここにはこの旧名に因んだ懐梆という伝統演劇が分布している。静応廟は実はこの懐梆の中心地としての側面があり、毎年ここで開催される廟会では多数の劇団が上演を競う習わしとなっている[*45]。

> かつて二仙廟は参拝客で賑わい、周辺の居民は正月や秋の収穫の後はみな廟に行って芝居を楽しんだ。特に毎月一日と十五日は多くの人でごった返した。三月三日は廟会の規模が最も大きく、周囲百里の人々がみなここに集まってきて、一ヶ月以上も続けられる[*46]。

懐梆は、明末に陝西省・山西省・河南省の境界地域で発生した、梆子という楽器を使った演劇が、「パンデミック」を起こしたかのように急速に中国各地に伝播した、梆子腔と呼ばれる演劇の一種である[*47]。梆子腔は各地で現地化し、さまざまな亜種が形成されたが、懐梆はその中でも山西省中南部に分布する上党梆子という劇種と、以下の点で共通点があることが指摘されている[*48]。

> (1) 懐梆の主伴奏楽器である「大弦」は、上党梆子の主伴奏楽器である「頭把」と同じ
> (2) 懐梆も上党梆子も同じ「胡胡」という呼称の楽器があり、さらにその別名も同じく「瓢」と称する

晋語や楽氏二仙信仰同様、梆子腔の上党梆子も山西移民によってもたらされ

いたとされる『西山雑志』に見える福建の少林寺伝説と関わり、さらに民国期になって梁啓超が中国武術の近代化を提唱する中で賞揚して行った結果であるが、本論からは外れるのでこの問題については詳述しない。劉福鑄「泉州少林寺史証考弁」（『福建師大福清分校学報』、1997年第1期、福清：福建師範大学福清分校、頁49-56）などを参照。

注43…揚州：江蘇広陵古籍刻印社、1997年、第三冊第四葉。

注44…程大力・張卓「少林寺“十三棍僧救唐王”詳考」（『成都体育学院学報』2007年第1期、成都：成都体育学院、頁46-50）でこの点について指摘がある。

注45…丁永祥『懐梆文化生態研究』（北京：中国社会科学出版社、2011年）、頁132。

注46…据说过去二仙庙的香火很旺，周边百姓逢年过节或麦收秋种后都要到庙里唱戏娱乐，特别是初一、十五，更是人来人往，车水马龙。三月初三庙会规模最大，方圏百里的人都聚集于此，时间持续常达一个多月。

注47…梆子腔系演劇の成立については拙稿「『封神演義』の戯曲化と民間信仰への影響」（『東方宗教』第101号、東京：日本道教学会、2003年、頁1-17）および「郇陽木偶戯の形成と梆子腔」（『近現代華北地

たものと考えられる。そしてこれを現地で経済的に支えたのもかれら自身であった。山西移民は済源・焦作一帯に流入後、現地に薬草が豊富に存在していることに目を付け、製薬およびその販売を行った。中でも地黄（ジオウ）・山薬（ナガイモ）・牛膝（イノコヅチ）・菊花（キクの花）は「四大懐薬」と呼ばれ、外地で大変な人気を得たため、これを取り扱う「懐慶薬商」は巨万の富を得た。かれらがパトロンとなることで、懐梆は大きく発展を見たのである[*49]。ただ梆子腔系演劇は一般に、明るく軽快な場面で用いる「歓音」と、悲嘆や哀愁を表現する「苦音」の二種類の節回しを持つのに対し、懐梆は前者しか持たないという点で、上党梆子と似ていないどころか、梆子腔系演劇全体の中でも特異な存在となっている[*50]。こうした点から、懐梆の外来説を否定し、元代に済源・焦作一帯で行われた雑劇に起源を求めたり、明代に「海神戯」と呼ばれた演劇に由来するとしたりする「本土発展説」も、一部の研究者によって説かれている[*51]。

しかし先に述べたように、楽器面で上党梆子と共通点があることは明らかで、また懐梆は梆子腔系演劇に特徴的な板式や演目も共有しているので、完全に現地起源だとするのは無理である。また、梆子腔伝播以前から「海神戯」と称する演劇が行われていたことは地方志の記述などから確認できるが、これは黄河・長江・淮水と並ぶ「四瀆」の一つで、済源に源流がある済水の神に奉納芝居を行うという、いわば上演の「形態」のことであって、演劇の「種類」ではない。実際、懐梆も後に「海神戯」を行っていることを考えると、両者を別のものと考えるのは困難である。むしろこれは、済源・焦作一帯でかつて海神戯を担っていた別の劇種に、山西省中南部から伝播してきた梆子腔が上から被さって懐梆が成立したため、基層となった劇種の様々な要素が残存していると考えるのが妥当であろう。

こうした懐梆の特性は、演目の上にも現れている。懐梆は、基層劇種の影響もあってか、ほかの梆子腔系演劇に無い独自の演目も多いが、中原に位置して

「二仙救唐王」

域における伝統芸能文化の総合的研究』平成17-19年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告論文集、2008年、頁28-35）などを参照。

注48…楊玉東「懐梆源流解読」、『焦作師範高等専科学校学報』、第23巻第2期、焦作：焦作師範高等専科学校、2007年。

注49…前掲『懐梆文化生態研究』、頁92-96および頁151-163。

注50…呂自強『梆子腔系唱腔的比較研究』（陝西人民出版社、2010年）、頁241-266。

注51…丁永祥『懐梆文化生態研究』（中国社会科学出版社、2011年）、頁29-40。

いるため「ご当地物」になりやすいのか、唐代の元帥・徐彦を描いた『反西京』など唐代故事が非常に多い[*52]。その上、そもそも梆子腔系演劇は瓦崗寨故事や薛家将故事など、唐代故事の演目を多く有しており、懐梆もそれを引き継いでいる。(懐梆『反西京』)[*53]

「二仙救唐王」の物語も懐梆における唐代演目、中でもこうした外伝の存在という文脈の中で捉えることができるだろう。静応廟の壁画の「二仙救唐王」が明らかに懐梆の戯装で描かれていることからも解るように、この物語も元来は懐梆の演目としても行われたものであった。王世充による鄭の建国や李世民配下の尉遅敬徳といった設定も、またその中で独自の物語が語られるのも、懐梆の枠組の中でのことである。

また一般に女神が将軍を助ける類の物語としては、例えば天書を与えたり、兵法を授けたりといった内容が多く、さらに仏教側の少林寺の説話では武芸で直接李世民を助けているのに対し、「二仙救唐王」では「尽きることなく、また疲弊した将兵を快復させる食べ物」によって李世民を救っている。これが「仙薬」のイメージに近いことを考えると、物語自体が懐梆の背後にいる懐慶薬商の存在を念頭に置かれている可能性もあるだろう。

なお懐梆は現在では復興し、静応廟の廟会も行われてはいるものの、かつては懐慶薬商の没落とともに停滞し、さらに日本軍による静応廟の破壊や、解放後の迷信禁止令、および河南省の大劇種である豫劇の侵入によって、一時は滅亡寸前にまで追い込まれていた[*54]。その過程で多くの演目が失伝したが、この「二仙救唐王」も例外ではなく、すでに上演は行われていない[*55]。

六、おわりに

以上をまとめると、魏華存の本来の形象が済源・焦作一帯では忘れられていたところに、の山西移民がもたらした楽氏二仙の説話が流入し、「十三和尚救唐王」の道教版として語り直され、懐梆の環境の中で流通していたのが「二仙救唐王」の説話であった、ということになる。現地では半ば史実として親しまれているこの物語が、別の女仙の説話や仏教側の逸話からの焼き直しであったというのは、特に関係者からしてみればやや決まりの悪い話であるかも知れない。しかし虚構という点では結局いずれも同じであるし、これによって魏華存信仰の価値が貶められるわけでは決してあるまい。むしろこうした説話の転変から、済源・焦作一帯の魏華存信仰のダイナミズムを見て取ることができるだろう。

その中で、意外にも大きな役割を演じているのが懐慶薬商である。山西移民に由来するかれらは、現地の既存の文化を摂取した上でこれを塗り替え、魏華

注52…王暁静「懐梆源流及其伝統劇目研究」、『河南教育学院学報(哲学社会科学版)』、2009年第2期、鄭州:河南教育学院、頁13-34。

注53…「懐梆」、『中国戯曲劇種大辞典』(上海辞書出版社,1995年)、頁1007。

注54…前掲『懐梆文化生態研究』頁235-274、および張莉「懐梆劇種伝承与発展問題的調査与思考」(『北方音楽』2014年第9期、哈爾浜:黒竜江省音楽家協会、頁102-104)を参照。

注55…趙振懐「我所知道的懐梆劇目」、『焦作文史資料第十輯・懐梆劇史料専輯』、焦作:政協焦作市委員会、2005年、頁337。

存という女仙信仰に新たな性質を持たせて、「二仙救唐王」という物語を成立させたのである。なお筆者は前稿「王屋山の伏虎説話」において[*56]、清代に済源・焦作一帯で「薬王」孫思邈の信仰が成立した過程について検討したが、これも王屋山で薬を見出した懐慶薬商の勃興の産物であったと言えるだろう。また別稿「王屋山と無生老母」では[*57]、現在王屋山で行われている「十二老母朝無生」の信仰について検討したが、これは懐慶薬商が没落した後「空白地帯」となったこの地域に、外地から民間教派が入り込んだ結果であった。近世以降における「道教第一洞天」王屋山の信仰の変遷を懐慶薬商の視点でたどると、おおむね以上のように整理することができるのではないだろうか。

注 56…『洞天福地研究』第５号、神奈川：洞天福地研究編集委員会、2014年、頁 37-50。

注 57…土屋昌明、ヴァンサン・ゴーサール編『道教の聖地と地方神』東京：東方書店、２０１６年、２月。